

第14講 戦前の文学

読解演習

解答

問一 ずっと後・今の私達の生活

問二 私達の幸福そのものの完全な絵

問三 うつとり・茫漠・取りとめ・苦しい・苛ら立たしき

問四 側背後で深い息のようなものを聞いた気がしたから。(二十三字)

問五 (1) イ (2) ウ

問六 「そんなにいつまでも生きて居られたいわね」

問七 (1) いましがた (2) エ

解説

問一 「私達がずっと後になってね、今の私達の生活を思い出すようなことがあったら、それがどんなに美しいだろう」とある。直接指すのは「今の私達の生活を思い出すようなこと」である。いつの時点で思い出すのかといえば「ずっと後」。

問二 「後に思い出したときこれに何が見出せると考えているか」という問い。この表現は本文の「これに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろう」という部分に対応している。ここから、答えとして「私達の幸福そのものの完全な絵」を抜き出す。

問三 前半の「夕暮」の場面から「私」の心情がわかる表現を順に押さえていく。この場面の中で「私」の心情や様子は「うつとりとそれに見入っている」↓「自分であるような自分でないような、変に茫漠とした、取りとめのない、そしてそれが何んとなく苦しいような感じさえて来た」↓「自分にも訣の分らないような気分が私にはだんだん一種の苛ら立たしさに変わり出したように見えた」と変化している。

問四 行動を起こした理由を考えると、前の部分から、そのきつかけとなったできごとを押さえる。二行前に「そのとき私は自分の背後で深い息のようなものを聞いたような気がした」とある。それが気になって振り向いたのである。

問五 (1) 話題に合う内容のものを選ぶ。後半の会話の中で節子は、「自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだ」という

言葉を思い出したと言っている。つまり、今の景色が美しく見えるのは「死」を意識したからだと考えたのである。したがって答えはイ。

(2) 節子はその後で説明した内容に合うものを選ぶ。節子は「あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだと仰しゃったことがあるでしょう。……私、あのときね、それを思い出したの。何んだかあのときの美しさがそんな風に思われて」と言っている。「私」が自然を美しく感じているのを死の前兆のように感じ、また、節子自身の死についても考えてしまい、不安になったと考えられる。これに合うのはウである。

問六 「そんなにいつまでも生きて居られたいわね」が、「あんなこと」に当たる。「あんなことを言っ」たために「私」を苛ら立たせたと考えて節子は「御免なさい」と謝っているのである。

問七 (1) 「苛立ち」に結びつく表現を前半部分から探す。すると、前半の最後の段落に「いましがたまでの何か自分にも訣の分らないような気分が私にはだんだん一種の苛ら立たしさに変わり出したように見えた」とある。それまでも、幸福感とは反する苦しい感じがしていたのであるが、それを「苛ら立たしき」として自分で捉えたのはこの段落である。

(2) 「私」は節子と二人、同じ気持ちで美しい夕暮をうつとりと見たつもりであったが、節子は「私」の様子に不吉なものを感じてしまい、心から風景の美しさに浸れなくなっていた。その心情のずれを、晩になり、節子と話すことで、はっきりと捉えたのである。